

最近の気象状況

7月の天候（気象庁発表）

報道発表日

平成 21 年 8 月 3 日

概要

2009 年（平成 21 年）7 月の天候の特徴は以下のとおり。

北日本から西日本にかけて寡照

梅雨前線が本州付近におおむね停滞し、また、北日本では気圧の谷の影響を受けやすかったため、北日本から西日本にかけては曇りや雨の日が多く、日照時間が少なかった。特に北日本日本海側、東日本、西日本では顕著で、北日本日本海側と西日本日本海側の月間日照時間は7月としては最も少ない値（地域平均の統計を取り始めた 1946 年以降）となった。

北日本で記録的な多雨

北日本では気圧の谷の影響を受けやすく低気圧が発達しながら頻繁に通過したため、降水量がかなり多かった。北日本太平洋側の月降水量は 1946 年以降7月としては最も大きい値となった。

「平成 21 年 7 月中国・九州北部豪雨」の発生など、各地で大雨

北日本から西日本にかけては、前線や低気圧および湿った気流の影響により各地で大雨が降った。中でも、19 日から 26 日にかけては西日本で梅雨前線の活動が非常に活発化し、中国・九州北部地方で豪雨が発生した。

本文

1 概況

梅雨前線が本州付近におおむね停滞し、また、北日本では気圧の谷の影響を受けやすかったため、北日本から西日本にかけては曇りや雨の日が多かった。このため北日本から西日本にかけては降水量が多く、日照時間が少なかった。北日本太平洋側では月降水量が7月の最も多い記録(地域平均の統計を取り始めた1946年以降)を更新し、北日本日本海側と西日本日本海側では月間日照時間が7月としては最も少ない値となった。

また、北日本から西日本にかけては、前線や低気圧および湿った気流の影響により各地で大雨が降った。中でも19日から26日にかけては、日本海から中国・九州北部地方に位置した梅雨前線に向かって暖かく湿った空気が断続的に流れ込んで前線の活動が非常に活発になったため、局地的に1時間100ミリを超える猛烈な雨が降り、16のアメダス観測所で総雨量500ミリ以上を記録する豪雨が中国・九州北部地方で発生した。一方、沖縄・奄美では太平洋高気圧に覆われて晴れる日が多かった。

気温は、北日本では前半は平年を上回り、後半は寒気やオホーツク海高気圧の影響により平年を下回った。東日本から沖縄・奄美にかけては平年を上回る期間が長かったが、月のはじめは西日本と沖縄・奄美で、下旬は東・西日本で、それぞれ寒気や曇雨天の影響により一時的に平年を下回った。

2 気温、降水量、日照時間等の気候統計値

(1) 平均気温

月平均気温は、沖縄・奄美で高かった。一方、北日本では低く、北海道では平年を1°C以上下回ったところがあった。東日本と西日本では平年並だった。

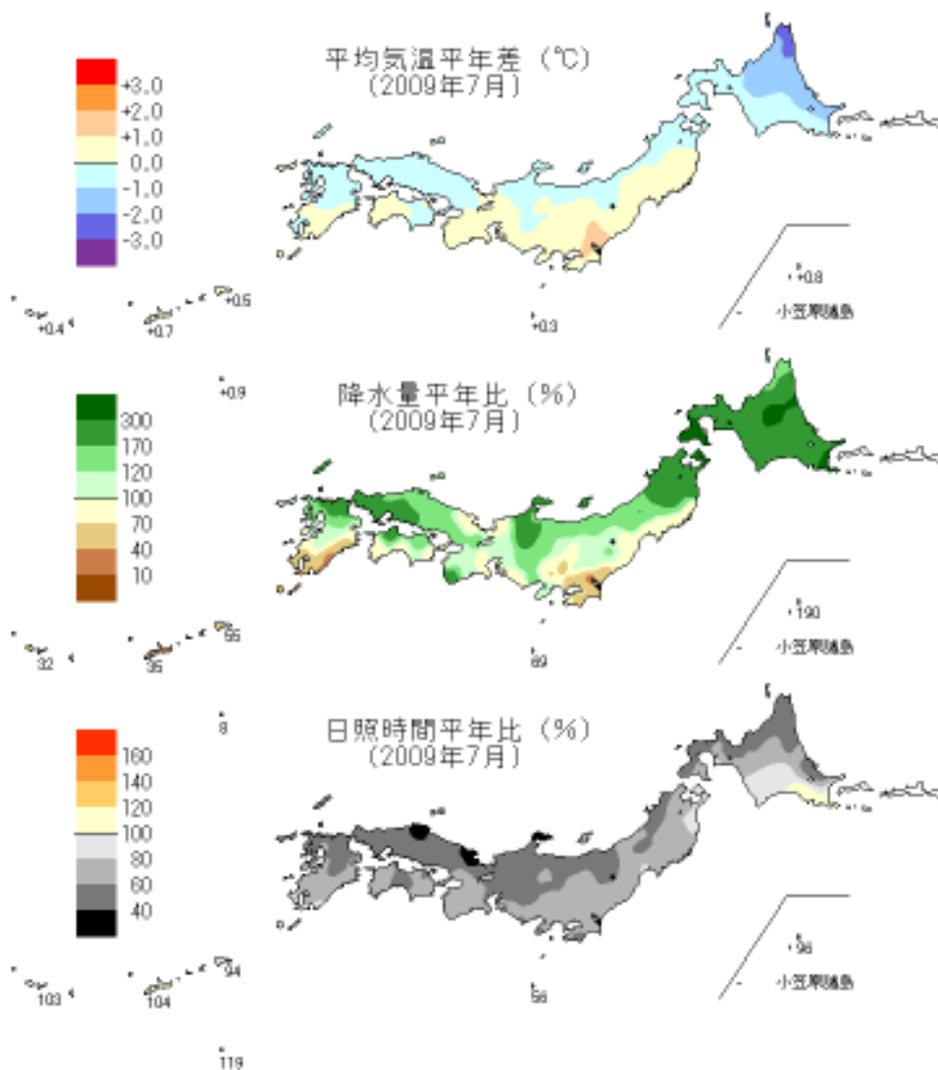
(2) 降水量

月降水量は、北日本でかなり多く、東日本日本海側と西日本で多かった。これらの地域では平年の170%を上回ったところがあり、北海道では平年の300%を上回ったと

ころもあった。釧路、苫小牧(以上、北海道)、むつ(青森県)、呉(広島県)、山口など10地点で7月の月降水量の最大値を更新した。一方、沖縄・奄美では少なく、東日本太平洋側では平年並だった。

(3) 日照時間

月間日照時間は、北日本日本海側、東日本、西日本でかなり少なく、北日本太平洋側で少なかった。特に北日本から西日本にかけての日本海側では、平年の60%未満となったところが多かった。寿都(北海道)、輪島(石川県)、岐阜、舞鶴(京都府)、姫路(兵庫県)など11地点で7月の月間日照時間の最小値を更新した。沖縄・奄美では平年並だった。



2009年夏の異常気象分析検討会での検討結果の概要(気象庁発表)

報道発表日

平成21年8月3日

概要

平成21年8月3日に異常気象分析検討会を開催し、2009年7月の不順な天候をもたらした大規模な大気の流れについて、その要因等を分析し、以下の見解を取りまとめました。

本文

【不順な天候】

北日本の多雨、日本海側の日照不足、九州北部地方から東海地方にかけての梅雨明けの遅れが記録的だった。また、「平成21年7月中国・九州北部豪雨」が発生した。

【特徴的な気圧配置】

太平洋高気圧の本州付近への張り出しが弱く、西日本から北日本にかけて低気圧や前線の活動が活発だった。

【その要因】

この気圧配置は、亜熱帯ジェット気流の南偏と蛇行の持続に伴うものである。

エルニーニョ現象や熱帯大気的气温が平年より高かったことが、亜熱帯ジェット気流の南偏と蛇行に影響し、太平洋高気圧の本州付近への張り出しを弱めた。

エルニーニョ現象に加えて赤道季節内振動*も、7月下旬における太平洋高気圧の張り出しが弱いことに影響した。

* 赤道季節内振動対流活動(発達した積乱雲の大規模な集合体)を活発化させる位相が、30～60日の周期で赤道域を東に一周する現象を赤道季節内振動と呼び、発見者の名前に因んで、Madden-Julian振動(MJO)とも呼ばれている。東西数千キロメートルにも及ぶ活発な対流活動が熱帯地方に大規模な大気の流れを作り出すため、その影響が中緯度にまで及ぶことがある。暖候期には、MJOの通過に伴って西部太平洋で活発となった対流活動が、その後ゆっくりと北西に進み、およそ1週間後にはフィリピン東海上に達することがよく見られる。